

「漫画家 神尾葉子の創る世界」 講演録



©Yoko Kamio

令和3年11月7日(日)

午後2時～3時30分

武蔵野プレイス 4階フォーラム・オンライン

目 次

◆ 概要・講師プロフィール	1
◆ 講演録	3
◆ 資料	
講演会の様子	24
同時開催企画（１）「消毒投票」	25
（２）「神尾先生おすすめ本・関連図書展示」	26
（３）「神尾先生への作品の思い出やメッセージ募集」	32
神尾先生よりご寄贈いただいた書籍とサイン	33
チラシ・ポスター	34
神尾葉子先生への作品の思い出やメッセージ募集用紙	36

1 概要

武蔵野市立 ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイスは、令和3年7月9日に開館10周年を迎えました。「プレイス・フェスタ」は、武蔵野プレイスの4つの機能「図書館」「生涯学習支援」「市民活動支援」「青少年活動支援」を融合した総合イベントです。

本講演では、開館10周年を記念し、国内のみならず海外でも大人気の『花より男子』（集英社）など、数々の作品が幅広い世代に支持されている漫画家・神尾葉子さんをお招きし、長年に渡ってご活躍される中での経験や、作品が与えた影響、その思いなど、作品と創作について質問にお答えいただきながら語っていただきました。その内容を収録いたします。

開催日 令和3年11月7日（日）午後2時～3時30分

会場 ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス 4階フォーラム
及び、オンライン（Zoom・音声のみ配信）

2 プログラム

午後2時00分 講演開始

・はじめに	3
・消毒液投票結果発表	3
・講師紹介	3
・神尾先生ご登壇	4
・漫画家になるまでのご経歴	5
・『花より男子』について	6
・『花より男子』メディアミックスについて	9
・『花のち晴れ～花男 Next Season～』について	12
・『キャットストリート』について	15
・「学びと活動の継続」	16
・未来のこと	18
・質問コーナー	19
・神尾先生よりご寄贈	22
・神尾先生より講演会を終えてのご感想やメッセージ	22
・神尾先生ご退場	22

午後3時30分 講演終了

3 プロフィール

神尾葉子（漫画家）

1986 年『はたちのままで待ってる』でデビュー。
1992 年～2004 年まで雑誌「マーガレット」で連載された『花より男子』で、第 41 回小学館漫画賞（少女部門）を受賞。単行本の累計発行部数は 6100 万部を超え、アニメ・ドラマ・映画など国内でのメディア化のみならず、台湾、韓国を始め世界各国で翻訳・ドラマ化され人気を博している。他にも『キャットストリート』、『虎と狼』、『まつりスペシャル』、『花のち晴れ～花男 Next Season～』など作品多数。



山下しづ香（フリーアナウンサー）

2007 年より、コミュニティ FM 局・むさしの FM でパーソナリティやレポーター、司会などを務める。現在は、毎週(月)放送中の「リラックス・モーニング」、武蔵野プレイス・B2 フロアを利用する青少年の課外活動を紹介する「BangBang BANG! スタジオプレイス」担当。人の“想い”を電波に乗せる橋渡しとしてマイク片手に奔走中。
好きなものは、猫・日本酒・かき氷。飼い猫・いね太(オス)とゴロゴロの日々を暮らす。



- ・構成の都合上、編集、割愛させていただいた部分がございます。
- ・本講演録は、講師・関係者の許可の元に作成しております。これらを無断複製、転載など、許可なく使用することはできません。全文、一部分問わずご遠慮ください。
- ・翻訳しての公開もご遠慮ください。

「漫画家 神尾葉子の創る世界」

講演録

（司会：山下） 皆さま、大変お待たせいたしました。本日はお忙しい中、ご来場・ご視聴いただきまして、誠にありがとうございます。只今より、「プレイス・フェスタ 2021 講演会『漫画家 神尾葉子の創る世界』」を始めさせていただきます。

私は本日の司会進行を務めます、地元のコミュニティ FM 局・むさしの FM でパーソナリティをしています、山下しづ香と申します。むさしの FM では、毎週月曜日の朝 8 時～11 時まで放送しております「リラックス・モーニング」という番組を担当しています。またこちらの武蔵野プレイスとのご縁としましては、毎月第 1 土曜日の午後 3 時から「Bang Bang BANG! スタジオプレイス」という番組を担当しています。この番組には武蔵野プレイスが開館後まもなくから携わっていて、地下 2 階にある青少年活動支援フロアを利用している 10 代の青少年達の活動の様子を紹介するラジオ番組となっています。

今日は 1 時間半という貴重なお時間になりますが、神尾先生にたくさんいろいろな話を聞き出せるように頑張りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

さて、皆さまにお越しいただいた「武蔵野市立 ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス」は今年 7 月 9 日に開館 10 周年を迎えました。本日最終日を迎える「プレイス・フェスタ」は、「図書館」「生涯学習支援」「市民活動支援」「青少年活動支援」の 4 つの機能を融合した毎年恒例のお祭りです。今年は開館以来築き上げた武蔵野プレイスと、地域や人との交流・繋がりを感じられるように、また、この輪を未来へ繋げられるように「未来へつなぐ、プレイスの輪」をテーマに様々なイベントを企画しています。今年はコロナ禍での開催のため、全てのイベントにおい

て新型コロナウイルス感染防止に努めての開催とさせていただきます。今後とも利用者の皆さま、地域の皆さまのご期待に応えられるよう努めてまいりますので、引き続き、ご支援・ご協力をお願いいたします。今日ご来場の皆さまも、マスクを着用いただきまして本当にありがとうございます。

さあ、会場の入口にて行っておりました、消毒液での投票結果が届きました。皆さま気になっていましたね。始まる前に、両方のタンクがきっちり同じ量になっているのを確認しておきました。オンラインでご視聴の皆さま、本日は会場にて、ご来場の皆さまに、「あなたは F4 のだれが好き??」と題しまして、「道明寺・西門派」「花沢・美作派」に分かれて、それぞれの「推し」がいる方の消毒液を使用いただく、プチ投票企画を行っていたんです。ということで……僅差ではあったようですが、ご来場の皆さまは「道明寺・西門派」が多かったようです。

拍手をしていらっしゃる方、押してくださったんですね！ まさに「推し」ということで、しっかり消毒をしていただいたようですね。後ほど、神尾先生にもお気に入りのキャラクターを伺えるかもしれませんので、楽しみにしていただきたいと思います。

それではこれより、「プレイス・フェスタ 2021 講演会『漫画家 神尾葉子の創る世界』」の講演に移らせていただきます。

本日ご講演いただきます神尾葉子先生の紹介をさせていただきます。

神尾先生は、1986 年『はたちのままで待ってる』でデビュー。1992 年～2004 年まで雑誌「マーガレット」で連載された『花より男子』で、第 41 回小学館漫画賞・少女部門を受賞されております。単行本の累計発行部数は 6100 万部を超え、アニメ・ドラマ・映画など国内でのメディア化のみならず、台湾・韓国を始め世界各国で翻訳・ドラマ化され人気を博しています。他にも『キャットストリート』、『虎と狼』、『まつりスペシャル』、『花のち晴れ～花男 Next Season～』など、多数の作品を発表されています。

本講演は、「漫画家 神尾葉子の創る世界」と題して、大ヒット作『花より男子』を中心に、神尾先生がこれまで描かれてきた作品から、先生の想いやお考え、ちょっとした裏話などをお話しいただければと思ってあります。皆さまにご応募いただいた際に事前に質問をたくさん頂きました。その中から特に多かったものをもとに伺っていく予定ですが、後半には本編に入りきらなかった質問コーナーも設けてありますので、どうぞ最後までお楽しみいただきたいと思います。

大変お待たせいたしました。それではお迎えいたしましょう、神尾葉子先生です！ どうぞ皆さん大きな拍手でお迎えください！

会場 （拍手）

（山下） 緊張されてますか？

（神尾） はい、少し緊張しております（笑）

（山下） 先生、SNS の方で、今回がもう最初で最後の講演会になるかもしれないって仰っていましたね。なかなかたくさんの方の前でお話をされる機会というのは、本当に貴重だと思いますけれども。

（神尾） はい。初めての、

（山下） 初めての！

（神尾） 経験で、緊張して、夜も眠れず……。

（神尾・山下・会場） （笑）

（山下） コロナ禍による規制が緩和になったということで、少したくさんの方に会場にお入りいただきました。また Zoom でご覧になっている方もたくさんいらっしゃいます。本日は貴重なお時間を頂きます。よろしくお願いいたします。

（神尾） よろしくお願いいいたします。

（山下） 先生、今回、どうしてこの講演のオファーを受けてくださったのか、教えていただけますか？

（神尾） 実はこの武蔵野プレイスさんに、高校時代からの親友が勤めていまして……。

（山下） えー！

（神尾） それで「出てみない？」と、ふわっと聞かれまして。高校時代からもそうなんです、漫画家になってからも、私がデビュー当時、彼女は全くの素人なんですがお手伝いをしてくれたり、いろいろとすごくお世話になっていまして。それで、まあ断れないなと（笑）

会場 （笑）

（神尾） あとはこの武蔵野プレイスさんが 10 周年ということで、こんなに貴重な節目の年に呼んでいただいて、ぜひ私も出させていただこうと思って、この場にいる次第です。

（山下） ちなみにこの会場に、そのお友達の方はいらっしゃるんですか？

（神尾） はい、たぶんいます。

（山下） おー！ 良かったら会場の方にだけ、ちらっとお顔を見せていただけますかね。そんな貴重な機会を作っていたいただいた恩人です！

会場 （拍手）

（山下） 本当に先生にとって大事なお友達なんですね。

（神尾） そうですね。

（山下） さあ先生、皆さんからたくさんのご質問をいただいているので、順に伺っていきたいと思います。まずはやっぱりなんといっても、先生が漫画家になるきっかけですね。どうして漫画家になろうと思われたのか。

（神尾） もともと絵を描くのがすごく好きで。子供の頃から油絵を習っていたりしたんですが、お話を考えるのが好きで。今でもあまり絵を描くのがそんなに得意ではないというか、まだまだ上手にならないといけないなと思っているんですけど。それで、高校生ぐらいの時ですかね。短大に通って、短大は全く別の分野だったんですが、1年生の時に、このままいくとなんとなく普通のお仕事をするイメージが自分でないなと思って。1年生の夏に、「じゃあ漫画を描いてみようかな」と思って、雷に打たれたように紙を買ってきて、なんとなく見様見真似で漫画を描いて。それ以来ですね。それでデビューも決まってしまったので。

（山下） すごい……！ 短大1年生の時に、思いきって描いてみた。それがきっかけなんですね。ちなみに一番古い記憶で、ご自身が描いた絵の記憶ってあるんですか？

（神尾） よく新聞の中に差し込まれている広告の裏ですとか、そういう後ろに絵を描いていた記憶はありますね。

（山下） 何の絵ですか？

（神尾） もうあれです。お姫様の絵ですね。やっぱりこう……縦ロールで、そういう絵をすごく描きました。

（山下） じゃあ本当に小さい頃から絵を描くのが好きだったんだけど、その頃からプロの漫画家になろうと思われていたのではなく、ある日突然、雷がびびーっと。

（神尾） そうですね。なんか描いてみようと思って、描き方も分からなくて。本当は漫画って、墨汁と、Gペンや丸ペンといったつけペンで描くのですが、一部ボールペンとか、よくわからないまま描いていました。よくこれを出版社の人が拾ってくれたのと、今でも不思議に思っています。

（山下） デビューまでの経緯としては、その時に描かれた作品を、何かに応募された。

（神尾） はい、そうです。少女漫画で、「マーガレット」という雑誌に投稿しまして、それで準グランプリという賞をいただいて。

（山下） では、もういきなりプロの漫画家になってしまった。

（神尾） そうなりますね。はい。何も知らずに。

（山下） 今の神尾先生からご覧になって、その時の作品はどうですか？

（神尾） いやもう、驚くほど下手で。もう誰にも見せられないような。本当に。スクリーントーンという、漫画で陰影をつけるセロハンみたいなものがあるんですけど、それを一枚だけ使ってるんですね。あとは本当にもう真っ白な状態で出していて、本当にひどい状態でした。だから漫画家になってからの方が、やや苦労したというか……。

（山下） そうでしたか。でも、思いがけないそういうきっかけからプロの道が始まったわけですね。

皆さんご存じのようにこの武蔵野プレイス、図書館を中心とした複合機能施設です。先生も事前にこの武蔵野プレイスにいらっしゃって、いろいろと施設の中をご覧いただいたということですが、印象としてはいかがですか？

（神尾） いや、もう私が知っている図書館とは全く違って。角張っていないというか、全部アールに

なっていてすごくおしゃれで、びっくりしました。

（山下） そうなんですよ。この建物は数年前に建築学会の賞も取られているくらい素晴らしい建物でして、皆さんぜひ今日は講演が終わったら建物もご覧いただけたらと思います。子供の頃の私たちが知っている図書館というのは、暗い静かなところという感じですが、これだけ明るいたくさんの日が差し込んでいる素敵な建物で、こうして先生のお話を伺えるということは本当に光栄なことです。

では、たくさんの質問を頂いているので伺ってきたいのですが、先生の愛読書や最近気になっているもの、映画や本など、何かありますか？

（神尾） 漫画家デビューしてから手塚治虫先生の話聞いたことがあって、「一流の漫画家になりたいのであれば、一流のものを見たり読んだりしなさい」と。そういうことがあって、なるべく世の中で流行っているものや、素晴らしいものなどは、時間が許す限りは目を通していききたいなと思っています。それで特にというか、「鬼滅の刃」も大好きなんです、

（山下） ヘー！

（神尾） はい（笑）。見ていましたし、映画も観に行ったりしました。

（山下） 古いものからそういった最新の作品まで、いろいろとご覧になって、チェックをしていらっしゃる。先生も「鬼滅」ご覧になっていたんですね。

（神尾） はい、見ました。泣いてました（笑）

（山下） ちなみにこの会場に、先生のおすすめ本をご紹介いただいています。今回、先生のイラストと共に展示をしていて、その横の棚にある本は借りることもできるようになっていますので、会場にお越しになった方はぜひご覧ください。先生のおすすめ本には手描きのPOP もございます。Zoom でご参加いただいている方にも、後日講演録に掲載いたしま

すので、「うわ〜今日会場に来ている方だけ見られるのはずるーい！」じゃなくて、ちゃんと見ていただけますので、ぜひ楽しみにお待ちいただければと思います。ちなみに先生、どんな本を選ばれたんですか？

（神尾） 割と古いものから新しいものまで選ばせていただきました。でも本当に好きなものがすごくたくさんあったので、その中から厳選してというか、選ばせていただいて。

（山下） ぜひ会場にいらっしゃる方はお帰りの前にご覧いただきたいと思います。

（神尾） ぜひぜひ。

（山下） では、もうお待ちかねですよ！ ここからは大ヒット作『花より男子』について伺っていきたいと思います。皆さんから事前にご応募いただいた質問が、やっぱり『花より男子』、「花男」についての質問が本当に多くありました。まずはこの作品を思いついたきっかけを教えてください。

（神尾） もしかして年代が私と一緒にご存じの方もいらっしゃると思うんですが、渋谷にチーマーというのが昔いたんですよ。

（山下） 懐かしい！

（神尾） はい、まあまあ悪い人達がグループに名前を付けてたむろしているっていう。私は別にその人達と全然関わりはないんですけど、そういうグループがお金持ちの学校にいて、お金持ちの中に貧乏な女の子が入ってきて、ちょっといろいろなひと悶着があったら面白いかなと思って始めたのが、『花より男子』のきっかけですね。

（山下） もともとのきっかけが、渋谷のチーマー…。

（神尾） はい（笑）

（山下） あまりにも意外過ぎたのですけれども。そこからお金持ちの中にちょっと貧しい女の子が入ってきて……というお話になったんですね。

そして 37 巻、完全版で 20 巻、長い作品の中でいろんなストーリーがありますが、特にこの流れ、ストーリーで気に入っているとか、このストーリーは思い入れがあるんだよねというエピソードはありますか？

（神尾） たぶん 21 巻だと思うんですけど、雨の中で道明寺とつくしが別れるというシーンがあるんですが、このシーンが私にとっても花男にとってもすごくターニングポイントというか。牧野つくしが道明寺のことが好きだという言葉が初めてそこで出るんですね。もうここで描いてしまったら花沢類には戻れない、と思いながら（笑）

（山下） あー、そうかあ（笑）

（神尾） それですごく覚悟を持って描いた回ですね。そういう記憶があります。

（山下） 皆さまの中にもうんうんと頷いている方が結構いらっしゃいますね。ではそのようなストーリーというのはどうやって考えていらっしゃるんですか？ 今、「花沢類には戻れない」と仰っていましたが、物語を描き始めた段階である程度最後まで見据えてではなくて、描きながらどんどん見えてくるという感じなんですか？

（神尾） はい、そうですね。連載漫画ではじめから終わりが決まっているということもよくあると思うのですが、私の場合はその先 3・4 回くらいまでしか考えてなくて、終わりも決めていません。それというのは、作者が終わりを決めていないと、読んでいる方（かた）もわからない、ということもありまして。その方が楽しいかなっていうのと、その先をどんどん決めてしまうと、私自身があんまり楽しくないというか、描いていて、「ああこんな展開になってしまった」

みたいな、そういうものがないので割と見切り発車でお話をつくっていくやり方です。でも危ないというか、思ってもみない方向に行ってしまう可能性があるんで、それはちょっと危険だなと思いつつも、その綱渡りを楽しんで描いていくことが多いです。

（山下） そうですか。では、先生は意外と描き始めてから思いもよらない方向にいろいろと回り道をしながら連載されているんですね。

（神尾） はい、そうです。

（山下） 続いての質問です。「印象的なセリフや言葉が数多くありますが、そのような言葉はどのように生まれたのか知りたいです。特に、『花より男子』での静の『とびきりいい靴を履きなさい。その靴が良い所へ連れて行ってくれる』というセリフが、もう十数年、心に残っています」という質問をいただいています。こういった形で作品の中の様々な名台詞が胸の中に刻まれている方は多いと思います。どういう時に思いつくのか、どうやって思いつくのか気になります。

（神尾） その静が言った靴の台詞は本当にヨーロッパで言われている言葉で、私も小学生の頃に聞いたことがあって、それをずっと心の中で温めて持っていました。あとは登場人物が育ってくると、この人はこういう台詞を言うとか、この人はこういうことを言わないとか、そういう差別化がどんどんされてきて。でも、この人にちょっとこういう言葉を言わせたいなと思う場合は、もうそれこそ七転八倒して、家を飛び出して行って、当時サウナに行ったりとか（笑）。いろいろと普段の生活ではしないことを楽しみながら、思いつくことをメモしたりとか、そういう風にしてお話を考えていたような気がします。

（山下） 先生がサウナで汗をかきながら名台詞を考えていらっしゃるというのは、想像するだけで生みの苦しみという感じがします。皆さんにとっても心に残る名台詞がたくさんあって、今こうして伺いな

がら思い浮かべていらっしやると思います。

では、その様々な登場人物について。最初の消毒液投票で、4人が2対2に分かれるだけでも僅差になったくらいですから、皆さんそれぞれ好きなキャラクターがいると思います。先生にとって、特に思い入れのあるキャラクターや気に入っているキャラクターはいかがでしょうか？

（神尾）　そうですね……。やっぱり主人公なので、牧野つくしが一番思い入れがあるかなと思います。ただ、この『花より男子』ってすごく長いんですけど、全編読んでみて自分で思うことが、やっぱり道明寺の成長物語だなと思っていて。はじめは本当に嫌な奴なんですけどね。それがこう、いい男になっていくという。なので、描いていてちょっと化学変化として起きたのは道明寺だなと思っています。けれど、F4と牧野つくし、みんなもう12年連載したので、365日あの人たちのこと考えていて、それでなんかもう、私の中では家族的な感じがあって。

（山下）　そうですね。むしろ家族以上じゃないですか。

（神尾）　そうですね、はい。

（山下）　12年かけて、その彼らもみんな日々成長して、当然つくしから影響受けたのは道明寺だけじゃないですものね。それぞれ変化していききましたものね。

（神尾）　そうですね。

（山下）　いろいろな人間関係がどんどん成長していく感じに、きっと皆さんも気持ちを投影しながら読んでいらっしやったんじゃないかなと思います。確かにそうですね。成長物語と言われれば、納得がいく感じもします。

物語に出てくる登場人物は最初から全員揃っていたわけではなく、途中からいろいろと出てきますけれども。こういうキャラクターをどの辺りに入れよ

うかなとか登場させようかなとか、キャラクターってどうやって考えてらっしやるのかなと。イメージされたりモデルになった方はいますか？

（神尾）　よく聞かれるんですけど、モデルになった方というのは、ほぼ、というかいなくて。はじめに大まかなプロフィールだけ、その人物のディテールだけを考えて、そこにエピソードをのせていくことによって、キャラクター像が作り上げられていくんですね。それでその人たちを動かしていくという感じですね。

（山下）　なるほど。それぞれのプロフィールみたいなものがきちんとあって、それで裏付けといいますか、背景もあって、登場していくという。

（神尾）　はい。

（山下）　やっぱり道明寺とか花沢類とか、名前も印象的なんですけれど。すごく華やかな感じで本当に美しい名前だなと思うのですが、名前を考えるのってすごく大変なんじゃないかなと。

（神尾）　そうですね。これも割とインタビューとか受けた時に何度かお話ししたことがあるんですけど。ちょうどこの漫画が始まったのが3月で、春で、「花より団子」という言葉は4月の花見シーズンに必ずテレビで言われることだと思うんですけども。まあ、「団子」は「男子」じゃなくて、普通の食べるお団子ですけど。はじめにF4全員をお菓子の名前にしようと思ったんですね。

一番最初に考えたのが、道明寺。道明寺粉というのは桜餅の原料の粉なんです。そうやって順々に考えていこうかなと思ったら、ちょうどその当時「1号連載を早めてください」と言われまして。1号連載を早めるって結構な前倒しになってしまって。1人しか考えられなくて。

（山下）　（笑）じゃあもう道明寺だけ。

（神尾） そうなんです。ただ、西門って総二郎って
いう名前なんですけれど、おすすめ本で私が選ばせ
ていただいた本で、『燃えよ剣』という新選組の本が
ありまして。

（山下） 今映画になっていますよね。

（神尾） そうですよ。司馬遼太郎先生の御本で、
POP にも書かせていただいたんですが、私、沖田総
司がすごく好きで。沖田総司の幼名が総二郎という
名前なんです。それで、誰かにこの名前をつけようと
思って。西門だけは「じゃあ総二郎にしよう」と思っ
て。あとの人はもう適当に（笑）

（山下） でもやっぱり道明寺派・花沢類派って分か
れそうな感じがありますけれど、意外と花沢類は後
から。

（神尾） そうですね。そもそも花男を始める時に、
やっぱり4人の中で花沢類がメインと決めていたの
で、なんとなく見た感じ印象に残るような名前にし
ようと思って。まあ、道明寺に取られちゃいましたけ
れど。

（山下） キャラクターが対照的でもんね。そうや
ってストーリーやキャラクターを作り上げているん
ですね。

『花より男子』だけでも12年間と先ほど仰いま
したが、その12年だけでもきっと執筆環境もどん
どん変わられていると思います。漫画を始めた頃、先
ほどペンのお話が出てきましたが、今は本当にガラ
ッと社会情勢から執筆環境はきっと変わられている
と思うんですけれど、当時はどういう状況で作られ
ていたんですか？

（神尾） 当時は、もうそれこそ完全アナログなので、
アシスタントさん達と机を囲んで、一緒にこう……
なんていうんですか、家内制手工業。ちょっとピンと
こない言葉かもしれないんですけど。本当にそう
いうアナログだったんですが、途中からだんだんデ

ジタルに移行していきまして。自宅でお仕事される
方も多いですし、私も途中からデジタルになりました。
2年前に連載が終了した『花のち晴れ』という漫
画があるんですけど、その時も仕上げはデジタル
だったんですが、ペンを入れる人物まではずっと変
わらずアナログでした。なんとなくデジタルで顔を
描くよりも、ペンで紙に描いた方がそのキャラク
ターに魂が宿るといえる、そういうイメージが私の場
合ですけど、ありまして。

（山下） そうですか。

（神尾） はい、ずいぶん変わりました。

（山下） ではだんだんとデジタルも交えながらと
いう感じで、作品に取り組まれていたという。

（神尾） そうですね。はい。

（山下） 少し、花男の生まれた背景というのが見え
てきたかもしれません。

『花より男子』といいますと、漫画としての作品も
もちろん皆さんの心に残っていらっしゃると思いま
すが、映像化ですよ！ 本当にすごいですよね。ドラ
マ、アニメ、映画のみならず、ゲームにもなっていま
す。数々のいわゆる「メディアミックス」で、皆さん
それぞれその作品のファンでいらっしゃると思うん
ですが、先生、最初に映像化されたのって台湾のドラ
マでしたか？

（神尾） 一番最初はフジテレビさんが製作された
映画なんですけれど、ドラマは台湾の「流星花園」で
すね。

（山下） 台湾でドラマが製作されるというのはど
うでしたか？

（神尾） そうですね、私そのお話をいただいた時に
まだ連載中で。台湾のプロデューサーさんが女性な
んですけど、すごく私の作品のファンで「ぜひやり

たい」と言ってくださって。なんとなく「じゃあお願いします」と、もう丸投げ状態で作っていただいたんですけれど、それがすごく素晴らしい作品で。今でもすごく仲良くさせていただいています。

（山下） そうですか。ご自身の作品が映像になるということには抵抗はなかったですか？

（神尾） なかったですね。漫画は漫画、映像化は映像化、と割り切って考えていたので。もう本当に単なる視聴者として楽しませていただいていたんです。

（山下） その後海外ですと韓国でもドラマになりました。もちろん日本でも映画やドラマになっています。こうして様々な役者さんが演じられていると、「ちょっとやっぱりイメージと違うんだよね」ということはないのかなって。ちょっと意地悪な質問かもしれないのですが……。

（神尾） いえいえいえ。見てくださっている方はどう感じられているかは分からないんですけど、すごく光栄なことに、どの製作スタッフにも私の漫画がすごく好きという方が2・3人いらっしゃるんですよ。それで、私よりもなんかこう、見る目が厳しいというか。「道明寺はこんなこと言いませんよ」とか（笑）すごくチェックを入れてくださったりとかして。なのでもう本当に安心してお任せしています。そのたびに台本とかを頂くんですけど、台本を読んで、「なんかこれ違うよね」ということもほぼなくて、私から何かを言ったことは一度も無いかもしれない。

（山下） そうですか。時折、何というわけじゃないですが、やっぱりこういった映像化になる時って、原作の方がちょっとイメージと違うとか、いろんなことによって我々の耳に入ってきがちですけども。それだけ映像化される際に必ず先生の作品の大ファンの方がスタッフにいらっしゃるんですね。

（神尾） ありがたいことなんですけれども。本当に

運のいい作品だなと思っていて。

（山下） 作品になるにあたって、皆さんが愛情をもって映像にしてくださっているということなんですね。

（神尾） はい。

（山下） それぞれ先生もご覧になっていますか？

（神尾） もちろんです。はい。

（山下） 日本だけではなく、海外でも評価されていることはどのようにお感じですか？

（神尾） とにかくすごく不思議で。私の手を離れていろいろなところに F4 やつくしが点在しているみたい。先ほども言いましたけれど、本当にすごく強運な作品だなと思って。愛されていて作者冥利に尽きるというか、幸せなことだなと思っています。

（山下） 先生ご自身は映像化になる場合に、どの辺りまで関わっていらっしゃいますか？ この辺りまではご意見をしたりとか、そういうことってあるんですか？

（神尾） いや、もう特にほとんどそれがなくて。私が関わっていることが、「台本ができました、これ見てください、いついつまでに返事をください」って出版社を通じて送られてきて、それをゆっくり見て、「いいですー」みたいな感じで（笑）

（山下） もうほぼ何も言わずに。

（神尾） 何も言わず。

（山下） それくらい先生の思いと、スタッフの方が映像化するにあたっての思いとがちゃんと一致しているという。本当に皆さんの愛情に包まれた作品ということなんですね。

（神尾） 本当にそうなんです。ここだけの話とか言いたいんですけど、それがなくて。そういうありがたい感じで進めてきました。

（山下） やっぱり国々によって文化の違いとか、またその作品で出てくる、例えば最初の頃『花より男子』はポケベルが出てきたりしていましたが、そういった時代の変化とか、いろいろと部分部分変えなくてはいけないことというのもあると思うんですけど。そういうところの「ちょっとこの辺り変えますね」とか、国ごとの価値観の違いによって変えたりすることには特に抵抗はないですか？

（神尾） そうですね。例えば中国でドラマ化していただいた時とかも、「中国ではこういう表現はできません」ということはやっぱりありました。でも、この漫画のテーマというか、基本となっているところは、やはり恋愛する気持ちだったり、誰かを好きだという想いだったり、そういう普遍的なものを柱としてちゃんと作っていただければ、あとはもうその肉付けが多少変わろうともいいかなと私は思っていたので、全てお任せで作っていただきました。

（山下） それくらい少しの設定に変化があっても、物語の大筋というか、一番大事にしていることにはほぼ変わりはないということですか？

（神尾） そうですね。

（山下） また各国の皆さんがそれを大事にして育ててくれているというところもありますよね。

（神尾） はい。

（山下） ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、いよいよ今度はタイで花男がドラマ化されます。「F4 Thailand／BOYS OVER FLOWERS」^(※)というタイトルでドラマ化されるということなんですけど、こちらはいかがですか？

（神尾） 私は拝見したことがなかったんですけど、最近「タイドラマ」というのが、ものすごく目覚ましい成長を遂げているとお聞きして、それから私も何作か拝見しました。いやもう男の子がかっこいいんですよ。

（山下） おおお！

（神尾） 本当に素敵で。まだきちんとした映像は頂いていないんですけども、すごく楽しみにしています。たぶん 11 月の半ばくらいから日本でも順次公開というのはお聞きしたので、ぜひご覧になれる方は見ていただきたいなと思います。

（山下） なるほど。有料チャンネルか何か。

（神尾） たぶんそうだと思います。

（山下） ご覧いただけるツールがあると思いますので、お調べいただけたらと思います。私もちょっと手元に情報がなくて非常に申し訳ないんですが、ぜひ。

ここでスタッフの方からメッセージが。私も先生にご案内するのをうっかりしていたんですが、よかったら水分補給をしてください。今日あったかいのでね。

（神尾） いえいえいえ。そうですね。

（山下） 皆さんもお手元にお飲み物をお持ちの方がいらっしゃいましたら、水分補給をしていただいて。食べ物ではないので大丈夫ですよ。思ったより今日あったかいですもんね。今日は休憩時間を設けることができなくて、ノンストップで 90 分ということですので。

さあ、各国の映像化も先生は全部ちゃんとご覧になっていらっしゃるとのことでした。

今日は Zoom で海外の方もご覧になっているとお聞きしました。「海外の漫画はどうお感じですか？」

という質問も頂いています。なかなか日本で海外の漫画を目にする機会というのは少ないのかもしれませんが、先生からご覧になった海外の漫画作品はいかがですか？

（神尾） 私もなかなか目にする機会がないんですが、ブックフェアなどであちこち行かせていただいた時に、読ませていただいたことが何度もあるんですけど、とにかく技術が高いんです。海外の方のあの絵のうまさってどこから来るのかなって思うくらいお上手な方が多くって。見せ方や演出の仕方など、デジタルに関してはすごく技術が高いというか、美しい絵をお描きになる方がすごく多いので、文章というか吹き出しの中がその現地の言葉でわからなくても、ちょっと写真集代わりに持っていたいと思うような。

（山下） 絵画作品として見られてしまうというような。

（神尾） そうですね、はい。

（山下） 絵がうまいというのはいろんな表現があるかもしれませんが、例えば描写力だとか写实的だとか、どういったうまさでしょうか？

（神尾） そうですね、描写力ですかね。すごくレベルが高いなといつも思いますね。

（山下） 言葉がわからなくても見ていたいというのはすごいですね。それくらい作品のレベルが高いという。先生はそういった海外の作品もご覧になっていらっしゃるということですね。

『花より男子』は、先ほどからアジアの国や地域の名前が出ていますが、欧米でもアメリカ、フランス、イタリア、スペインでも出版されています。その欧米での現地の反応というのは先生の耳に届いていますか？

（神尾） 何年か前にスペインのブックフェアにサ

イン会で同って、そこでスペインの読者の皆さんとお会いすることができてとても感動しました。漫画ってすごいなって。言語を超えるといえますか。

（山下） 皆さんご存じの通り、世界各国で日本の漫画・アニメ作品というのは本当に評価が高いという風に言われています。先生も現地に行かれてファンの方の熱量ってどうでしたか？

（神尾） そうですね、いきなりこう……泣き出されたりとか。なんかもらい泣きしてしまったりとか（笑）。すごくうれしかったですね。お会いできて。

（山下） 今日先生にとって貴重なファンの方との出会いということになりますね。それくらい海外の方も心奪われているんですね。

では、今度は『花より男子』を離れまして、まあ離れるといいましても続編『花のち晴れ』について伺ってきたいと思います。こちらやはりファンの方が多いと思います。別のインタビュー記事で『花より男子』を島に例えていらっしゃるのを拝見しました。そこでは、続いての『花のち晴れ』はその島に再び船を出したものだという風な表現をされていました。その『花のち晴れ』の連載を終えられて、どのようにお感じになっていますか？

（神尾） 『花のち晴れ』は、「少年ジャンプ+（プラス）」という無料配信の集英社のアプリ内で何か連載してもらえませんか、一番最初お話をいただきました。

（山下） まさにデジタルの世界ですね。

（神尾） そうですね。それでジャンプなので、ほとんど男性が読まれるかもしれない。

（山下） 少年漫画。

（神尾） 一応、少年漫画というくくりで。それで、花男でできなかったことというのがいくつかありま

して。英徳学園という学校を出すのであれば、学校同士の抗争とかそういうちょっと男の子目線の。

（山下） ぶつかる感じ。

（神尾） はい。でも私の作品なので、やっぱり恋愛がメインなんですけれども、そういうものを描いてみたいなと思って始めた作品ですね。

（山下） それでお使いのものもデジタルで。

（神尾） そうです、はい。

（山下） なるほど。それでそういった要素から膨らませていって。

（神尾） はい、そうです。

（山下） やっぱり読んでいて、「あ、『花より男子』のキャラクターも出てきてくれるのね」というのが。

（神尾） そうですね。英徳学園を出すのであれば、あの人達も出さなくてはいけないなと思って（笑）

（山下） それはファンの方々の要望というかご意見みたいなもので、「せっかくだから英徳学園出すのであればF4出してよ」というのがあったのか、それとも先生の中でもともと出すおつもりだったのか。

（神尾） もともと出すつもりではありました。

（山下） そうですか！

（神尾） はい。私自身が「描きたい」と。それこそ先ほども言いましたけれども、12年連載していて、もうずっと自分の中にあるような人達なので、久しぶりに描きたいなと思って、出したきっかけでもあります。

（山下） 先生ご自身も『花のち晴れ』を通して久しぶりに花男のみんなに会えるというか。

（神尾） そうですね。なんかこう、描く手がちょっと震えたというか。久しぶりに描いて大丈夫かという、すごくドキドキしながら描いた記憶があります。

（山下） やっぱり久しぶりに描くとなると、ちょっとなんかこう、違う絵になっていたらとか、違う感じになっていたらとか。

（神尾） そうですね。長いこと描いていたので、顔が変わるっていうことはないんですけど、上手に動かせるかなというか。

（山下） キャラクターとして。

（神尾） はい。意外と描いたらすんなり描けたので、まあ大丈夫だなと。

（山下） やっぱりもう家族以上、体に沁みているというのがありますよね。

（神尾） そうですね。

（山下） たぶん読者の皆さんも、その後のF4を気になっていらっしゃったでしょうから、そこで再び登場してくれることで、「また会えた」というのはあったんじゃないかなと思います。

アプリで掲載されて連載の形態がガラッと変わりましたし、前は少女漫画・今回は少年漫画というのもあります。そういった違いというのは、先生ご自身戸惑いはなかったですか？

（神尾） 少年漫画で連載をするということで、基本は変わらないですけども、先ほども言いました通り、少年はとにかくわかりやすくなくてはいけないという。それは少年漫画の担当編集さんとお話ししていて、少女だと感情的な部分に余白をつくっても

皆さんわかってくださるんですよ、なんとなく。だけれど男の子が読むとすごく論理的に、ちゃんとその辺りを描かなければ、もしかしたらちょっとわかりづらいかもしれないという。そこをすごく意識して描いた記憶がありますね。

（山下） 少女漫画だと「なんとなく雰囲気で察してよ」という感じがあるのが、少年漫画はちゃんと一言一句説明をして「これはこういうことなんだよ」と次に進む。なるほど、そういうことも心掛けて作品に反映していらっしゃる。そういう少女漫画・少年漫画の違いというものもあるんですね。

（神尾） そうですね。あとデジタル配信だったんですけど、日付が変わったらすぐに掲載されるんですね。0時1分とか。

（山下） きっかり日付変わりましたの瞬間。

（神尾） その瞬間にアップロードされるんですね。皆さん読めるようになるので、良くも悪くもすごく反応がわかりやすいという。

（山下） なるほど。

（神尾） 私たち、紙で連載している時はお手紙を頂くとかアンケートですとか、ちょっと時差があるんですね。「あの時のあれが好きでした」というのを、何週間か遅れに頂いて読むとか。それがデジタル配信だと0時きっかりに書かれる方は書かれるし、そういうのをドンと見せていただけるというのはすごく新鮮で面白いなと思いました。それで一度やってみたいなと思っていたんですけど。

（山下） ファンレターという形で届く反応と、また味わいや感覚というのも当然それぞれの良さというのがあると思います。時間が変わった瞬間に、11時59分から0時を回った瞬間に、サササッと皆さん読むの早いですよね。もう数分で反応が返ってくる。

（神尾） はい、早いですね。

（山下） それはご覧になった瞬間にどうお感じになるんですか？ 「ああ、こういう受け止め方か」とか。

（神尾） 私は読ませていただいて、「じゃあ次はこうしようかな」とかそういうことはあんまりないんですけど、すごく参考になりますね。「ここちょっとわかりづらかったかな」とか、それこそ、「次回はこういう風にしてみようかな」とか。

（山下） なるほど。それも次のお話を描き始めていらっしゃる中に、そのコメントの即時性みたいなものが影響があるということなんですね。

（神尾） そうですね。

（山下） 即時性といいますと、やはり今はSNS全盛の時代ですけれども。先生もSNSをやっているって、そういうところに届く感想というのはどういう風にお感じですか？

（神尾） すごくありがたく拝見しています。嬉しいなと思っても、なかなかお返事できないことも多いのですが。

（山下） 直接の反応、交流というのができるようになって、また時代の変化というのを感じますね。

ではぜひ最後に、先生にとって『花のち晴れ』はどんな作品でしたか？

（神尾） 5年間連載をさせていただいたんですけど、すごく久しぶりの隔週連載で。隔週連載というと、2週間に1回締め切りが来るんです。花男以来の隔週連載だったので「私できるかな」と思って、ちょっと心配でした。けれど、自転車に乗ったことがある人が久しぶりに自転車に乗っても乗れるような感じでなんとなく連載をできて、すごく楽しかったですね。その時にもうデジタル化を進めていましたし、学

校同士の抗争とか、恋愛だけではなくていろんなことを描けて、私にとっては勉強になった楽しい連載でした。

（山下） そうなんですね。またF 4と違って、C5という5人になって、その中に女の子がいるという違った形からお話が膨らんでいきましたから、そこから更に皆さんそれぞれのキャラクターにファンが増えてきたのではないかなという感じがします。

『花より男子』、そして『花のち晴れ』とお聞きしてきました。もちろん皆さん、先生のその他の作品のファンの方も多いと思います。その中でも気になったのは『キャットストリート』という作品です。デリケートなお話かなとも思うのですが、フリースクールというのを題材にしたのはどうしてだったのかなとお聞きしたかったんですけども。

（神尾） はい。花男が終わって半年で始まった連載で、12年の長丁場を終えて、身も心も割とボロボロになっていた時に始まって。それで主人公の元天才子役であった恵都（ケイト）という女の子がいるんですけど、その子とすごく私、リンクしてお話を進めていった記憶があります。

なぜフリースクールかということ、花男を描いていた当時、まだ日本でフリースクールというのをあまり耳にしたことがなくて、そんな時にCNNの深夜のアメリカの番組でフリースクールの特集が組まれているのを見たんです。「あ、学校に行けない子供たちが行ける学校というか、場所みたいなものが、もう海外ではあるんだ」と思って、こういったものをいつか漫画にできたらいいなと思って温めていた話ではあるんですね。

（山下） それでフリースクールを題材にされたんですね。確かにまだまだ、日本でも今でこそいろいろと選択肢が増えてきたとは思いますが、作品からそういった「フリースクールってあるんだ」って知った方もきっといらっやしたと思います。

（神尾） はい。

（山下） ご応募いただいた質問の中には、「キャットストリートの、ケイトを中心とした不安定で儚くも根底に温かみのある作品の雰囲気大好きです。作品の世界観を作り上げる際に特に気をつけていること、力を入れていることはなんですか？」というものがありません。

（神尾） この『キャットストリート』に関しては、他の作品ではあまりないんですけど、私読み返すと泣いちゃうんですよ。自分の漫画で泣いちゃうとかちょっとすごく恥ずかしいんですけど。なんかすごくぐっときてしまうんですね。なんていうか、登場人物達を何とかして幸せにしてくれやないかと思いながらいつも描いていて。気をつけていたのが、登場人物達が子役だったりサッカー選手だったりITの社長になった子だったりとか、そういういろんなちょっと突飛な職業ではあるんですけど、持っている心の優しさだったりとか、弱さだったりとか、そういうことを丁寧に描いていこうと思っていました。花男が終わって、やっぱり花男みたいな話をという期待感みたいなものが世の中ではあったんですけども、この作品をしっかりと描けたのが、私にとっては一つの財産になったなあと思っています。

（山下） きっと読んでいらっしゃる方々にとっても、「あっ、こういうお話も先生表現されるんだな」と思われた方も多いかと思います。先ほど重ねていると仰っていましたが、お話しできる範囲で、どういった点を……。

（神尾） 私自身は学校も行っていましたし、全然そんな悪い子とかではないのですが、毎日「なぜ学校に行くんだろう」と思いながら通っていたところがありまして。それで、「こういう場所があって、そこにこういう仲間がいたら、どんなに楽しいだろうな」と思って、連載している時は描いていました。

（山下） たしかに、学校に行くことって当たり前のように受け止めていますけれど、でもやっぱりその

中には、毎日毎日子供たちにとって葛藤があったり、行きたくない日もあるけれど「親が怖いから行かなきゃ」とか。なんとなく「行かなきゃ」という気持ちで行ってるというか、習慣になっていて。でもそこを一步踏みとどまって、立ち止まって考えると、きっといろんな心の葛藤があって。寄り添ってくれる場所が別にあるっていうことを知ると、その苦しみから解放されたお子さんたちもきっといるのかもしれない。またこういったお話から希望を頂いたお子さんたちもいたんじゃないかなと思います。

いろいろと各作品のお話を伺ってきました。「もっとこんな話聞いてよ」なんて方もいらっしゃるかもしれませんが、「プレイス・フェスタ」というイベントの一環ということですので、長年漫画家の第一線で活躍していらっしゃる先生にも、ぜひ「学びと活動の継続」というテーマで、この武蔵野プレイスに寄り添ったお話も伺いたいと思います。先生が日頃、漫画を描くうえで気をつけていらっしゃることや、「これを大切に作品を描いています」ということがあれば、ぜひ伺いたいのですが。

（神尾） まず、本当に一番大事なのが、自分が楽しむことです。好きなもの描くというか、嫌々描かない。もう嫌になっちゃうので（笑）。あとは、わかりやすいことが大前提で、読者を置き去りにしないということが、二番目に大事なかなと思っています。

（山下） 先ほど『キャットストリート』を読むと自分も涙してしまうと仰いましたけれど、それくらい客観性をもってご自身の作品をご覧になっているのかなという印象があります。

（神尾） そうですね、描いている最中は泣きながら描いているということではなくて（笑）。もちろん、終わってなんとなく客観的に見返すと、「もっとこうすればよかった」とか、そういうこともいくつかあるんですけども。そうですね、そういう風に見ることもあります。

（山下） 改めて今回、私司会をさせていただくとい

うことが決まって、周囲の方にも『花より男子』とうでした」という風に聞いてみたんです。40代後半から50代前半の方々が、もう目がハートになって、「青春時代のあの頃に熱中して読んでた！」っていうのをすごく語ってくださったんですね。その思いを感じていると、漫画も映像も世代を超えてどんどん引き継いでいけるということがすごく魅力だと思うんですね。こうやって青少年世代に勇気を与えてきたというか、ワクワク・ドキドキしてもらってきたということに関してはどのようにお感じになっていきますか？

（神尾） 「勇気をいただきました」とか「毎日楽しみでした」とか言っていたのは本当に嬉しくて、そういう言葉から逆に私の方が力を頂いているというか。とにかく漫画家冥利に尽きるというか、続けてきてよかったなといつも感じています。

（山下） 続けてこられるそのモチベーションはどこにあるんですか？

（神尾） モチベーションは、お話を考えるのが子供の頃から好きで、なんかこう……思いつくとぼんやり歩いていて、何かにぶつかったりとか、ちょっと漫画的なんですけど、そういうような子供だったので、もともと考えたりとか、イメージしたりするのが好きなんですね。なので向いていたんだと思います。

（山下） その「好き」が今の今までずっと続いているということですか？

（神尾） そうですね。連載自体は2年前くらいに終えて、今は別に準備している仕事があるんですけど。そうですね、続いていると思います。

（山下） それだけ青少年世代の方々にも、原点となる好きという気持ちを大事にしてほしい。

（神尾） そうですね。

（山下）「好きを力に」というのは本当なんですね。

（神尾） そうだと思います。

（山下） 先生の原点、物語を考えるのが好きだという気持ちが、今までずっと作品づくりに繋がってきているということも感じることができます。

描いていてよかったなと思われる時もあるかもしれませんが、ちょっと意地悪な質問ですが、「もう何もかも捨てて、何もかもやめてしまいたい！」みたいな、「わああああ！」っていうことっていうのはないですか？

（神尾） あります。もう長い漫画家生活の中で、私30年以上漫画家をやっているんですけど、何度もあります。特に漫画家になり始めて5年くらいは、編集さんに「とにかく成長が遅すぎる」と。結局前のステップがないままに漫画家になっているので、絵もお話も本当に上達しなくて。

（山下） 最初ボールペンで描いていらっしやったりとか。

（神尾） ボールペンとか、「これペンがそもそも違うから」とか言われて（笑）。その当時の編集さんってすごく怖かったので、いつも怒られていて。なかなか絵もうまくなりませんし。それで周りの同い年の友達とかが、皆さん社会に出ていくわけですよ。それで、たまに会うとボーナスの話とかするんですね。

（山下） そうですよ。

（神尾） 私はもちろんボーナスとか一度ももらったことないですし、友達なんか生き生きして楽しそう。世の中が変わって行って、なんとなく自分が家でずっと作業をして置いてきぼりになっているような、そういう気持ちがありました。「ああ、今だったらやめて、あそこの集団の中に入れるかもしれない」ということも多々あったんですけども。なんか、だんだん楽しくなってきたんですよ。プロ意

識が全然追い付いてこなかったんですけど、途中から「キャラクターを動かせる、動かせた」という自負が自分の中で生まれた時に、すごく楽しくなって。そこから今に続いているプロ意識というものが生まれてきたのかなと思って。

（山下） その「キャラクターを動かせた」という自負が生まれた瞬間って、何の作品のどういうところだったとか覚えていらっしやいますか？

（神尾） やっぱり花男ですかね。20代の、確か24から5くらいの時から始めているんですけども、その辺りからなんとなく楽しくなってきたというか。

「お話を考えるのがこんなに楽しい、絵がついていかない、絵を頑張らなくちゃ」とか。それでデッサン教室に通ったりですとか。

（山下） ヘー！

（神尾） 全然そういうことをやってこなかったの。スケッチして、人間の手はここから生えているとか、そういうところからですね。1巻とか自分でも恥ずかしいくらい下手なんですけど、だんだんうまくなっている過程が作品の中で見ていただけたと思います。

（山下） そうですか。じゃあ花男の連載をしながらも、陰で絵を習うというか、そういう努力もされつつ。

（神尾） はい。

（山下） やはりそれって、ファンの方々により良いものを見てほしい、読んでほしいという気持ちですよ。

（神尾） はい、そうですね。「なんかこの線おかしいんじゃない？」とか、そこでお話を読んでもらうのではなくて、違ったところに目が向かないように、それを大事に描くというのが。

（山下） なるほど。せっかくだからお話にのめりこんでほしい。

（神尾） そうですね。

（山下） 没頭してほしいけれども、「ちょっとこの絵って……」とか、「この腕の生え方って……」とかいう（笑）

（神尾・山下）（笑）

（山下） そういうところに目が行くと、話が滑ってしまいますもんね。

（神尾） そうですね。その辺は精いっぱいやりたいと思って。その辺からプロ意識が育ってきたと思います。

（山下） そういったご努力もあって、12年連載ということになったわけですね。

先ほどチラッと、今ご準備の仕事がとポロッと漏らしていらっしゃいましたけれども……。せっかくですので、今後の未来のこと、お話しできる範囲で伺おうと思うのですが、先生の未来、どんな姿が描かれていますか？

（神尾） これがですね、足並みそろえての公表になってしまうので、私すごく言いたいんですけど、まだお話できなくて。でも、皆さんに楽しんでいただけるものをつくりたいのと、本当に総力を挙げて頑張っているところです。

（山下） なるほど。先生はもうすでに新しいお仕事にとりかかっているらしいと。本当に貴重な、楽しいな情報を頂きました。

実は今回の「プレイス・フェスタ 2021」のメインテーマが「未来につなぐ、プレイスの輪」となっています。先ほどはお仕事の話でしたが、先生ご自身、一人の女性としても、例えばやってみたいものや、これから挑戦してみたいこと、更に飛躍すると漫画界

の未来のような、何かこの先に向かって考えていらっしゃる事があれば、最後に伺えたらと思います。

（神尾） 漫画、漫画界の未来……。

（山下） ちょっと大きいですかね（笑）

（神尾） 私は今、ちょっと漫画をお休みしている状態だったので、そんな大げさなことが申し上げられないんですけど。でも、いつの時代もエンターテインメントの役割ってすごく大きいなと思っていて。今年とか去年とか、コロナで今まで通りの生活ができないとなった時に、「これが楽しみだから頑張る」とか、「これを見たから元気が出た」とか、そういったものに自分もこれからも関わっていききたいなとは思ってます。

（山下） そうですね。コロナ禍といわれるようになってもう2年弱ですけども、一時期外出できず、本屋さんも図書館も閉まっていた、本が大好きな方にとってはその本1冊見つけることもできないとなった時に、いろんな出版社のサイトで、期間限定で一気に無料で配信されたりとかしましたね。

（神尾） はい。

（山下） そういった形でいろんなツールを使って、モノを見る・読むということができるようになったというのは、子供たちにとっても、また我々大人にとっても一つの喜びに繋がったということがあると思います。先生の作品もそういった時に無料公開みたいなことというのはあったんですか？

（神尾） そうですね。何度かアプリとかいろんなツールで公開させていただきました。「見ました」とか「元気出ました」とか、連絡を頂くのが何よりもすごく嬉しかったです。

（山下） どういう状況になっていくかわからない中で、エンターテインメントの在り方といいますか、

寄り添い方というものが問われた時間だったのかなと感じます。また私たちにとっても、当たり前にあるものが一つひとつとっても大事な存在だったんだということに気づくことができた時間にもなったと思います。

ここまで作品のこと、そしてこれからのこと、先生に伺ってまいりました。時間は残すところ 20 分となりました。ここからは、ざっくばらんにいろんな質問を頂いていますので、時間の限り聞いていきたいと思います。先生や作品への熱い思いとともに、本当にたくさんの質問をご応募の方から頂きました。

（神尾） ありがとうございます。

（山下） 本当に皆さんありがとうございます。本来でしたらこの講演を受けてこの場で挙手をして先生に直接質問を投げかけたり、Zoom でもそういった機能がありますが、残念ながら今回はコロナ禍ということもありますので、事前に頂いた中から、本編に入りきらなかったものを伺っていききたいと思います。

では、「これから漫画を描くとするデジタルは学んだ方が良いと思われますか？ 一応アナログで何度か投稿歴があるんですが、最近はデジタルの方が多い印象です」という質問です。

（神尾） お好きな方法で描かれるのが一番だと思います。私たちはデジタルでも描いていますし、アナログでも描いてきたんですけど、両方できると停電の時にね、みたいな。

（神尾・山下・会場） （笑）

（神尾） みんなそういうのをちょっと冗談で言うんですけど。デジタルだけだと、停電の時に電気が。まあそんなことは滅多に無いとは思うんですけど、タブレットは停電だと落ちちゃうので。

（山下） やはりアナログというのもちゃんと体験しておく。

（神尾） そうですね。いいと思いますけれど、今ご質問いただいた方が、「デジタルを学んだ方がいいですか」ということだったので、それはもう本当に、ご自分の好きなように。デジタルは便利は便利です。簡単に消せますし。アナログとは違うのでいいと思います。私もずーっとアナログの期間が長かったので、デジタルに移行するのが、勉強するのが結構大変だったんですね。覚えていくまでが。だからもし若い人だったら、若いうちにそれを学ぶのは、アナログで漫画を描くにしても、デジタルも知ってるというのはすごく強みだなと思います。

（山下） それだけ武器をたくさん持っているというのは、いざという時に自分の作品の幅を広げることにも繋がりそうですね。

（神尾） そうですね。

（山下） 先ほど『花のち晴れ』の話でも、アナログもデジタルも両方という風に仰っていましたから、やはりそういったいろんな方法というのを身に付けていくことが大事ということですね。

（神尾） はい。

（山下） さあ、そして、「花男が好きすぎて、私も漫画にどハマりしてます。高校生で進路に迷っているのですが絵が好きだけで漫画家になれますか？」という質問です。

（神尾） なれると思います。先ほどもお話ししたんですけど、私は本当に絵が下手で、当時それで漫画家になって、そこからの努力という感じだったんですけど。お話をつくるのも訓練なので。

（山下） そうなんですか！

（神尾） やりたいと思ったらぜひ、漫画界の未来のために頑張っていただきたいと思います。

（山下） やっぱり「絵が好き」という気持ちですよ。先ほど先生もお話を考えるのが好きというのは、原点として根底にずっとあるというお話でしたから。「絵が好き」という気持ちの熱量を持ち続けるというのがやっぱり大事かもしれないですね。

（神尾） そうですね。

（山下） そして続いての質問です。「作中に登場する海外の描写がリアルで毎回自分もその国に居る気になれるのですが、作中に登場した風景は実際に先生が行かれた場所ですか？」という質問です。

（神尾） ほぼすべて行っています。行って写真も撮ってくるので。ニューヨークもカナダも、いろいろなところですね。

（山下） フランスもですね。

（神尾） はい、フランスもちろん。行って写真を撮って、それをもとにアシスタントさんたちと背景を描いたりとか。

（山下） 今だともう、ネットでピピッと見られたりもしますが。

（神尾） でも皆さんが出された写真には一応、著作権があるので。それを見て描くのはいいかもしれないですけど、現地に行って、自分がその空気感の中で撮ってお話を形成するというのは、すごく臨場感というか、そういうものがきちんと描き出されるので、必要だないつも思ってます。

（山下） よく我々「ロケハン」という、「ロケーション・ハンティング」という言葉を使いますが、やっぱりドラマや映像をつくれる方とか、また作品を描かれる方というのは、必ずそういう風に現地に出かけるという話もあります。先生もそのロケハンをすごく大事にしていらっしゃるということですね。

（神尾） はい、大事にしています。でも、気分転換に外国に行って写真を撮って、それを使える時は使うという感覚が多くて。そのために行ったというのも何回かはありますけれど。

（山下） 作品の中で見ることができる世界の素敵な景色や建物は、先生の目を通してロケハンしてきたということになりますよね。

（神尾） はい。

（山下） これもよく聞かれる質問かもしれませんが、ある種皆さん気になるかもしれません。「もし漫画家以外で生まれ変わったら何になりたいですか？」こういう質問よくあると思うんですが。

（神尾） そうですね……。

（山下） 考えたことがありますか？

（神尾） 考えたことなく……。山下さんどうですか？ パーソナリティ以外に何か。

（山下） 全く思いつかない！

（神尾） そうなんですよー。意外と。

（山下） 私はお勤めしたことなくて、フリーランスでこの喋るお仕事をやってきてるので。

（神尾） 私も、お勤めしたことない。

（山下） そうなんです。だからきちんとタイムカードを打って、朝から夕方まできちんとした、月曜から金曜、カレンダー通りのお休みがあってというお仕事を、今からでもいいのかもしれないですが、何でもちょっとやってみたいなという気持ちはあります。全く違う生活スタイルを体験してみたい気はしますね。

（神尾） 私もそうですね。20歳の辺りで悩んでいた、輪に入れるかもしれないと思った――

（山下） お友達のね、「今度のボーナスで何買う？」みたいな。

（神尾） そうですね。言ってみたいですね。次の人生では（笑）

（山下） そう思いますね。

では、『これには目がなし』というものがおありでしたら教えて下さい」ということで、大好きなもの、食べ物でも場所でもモノでも、何でもいいんですけど、先生がいろんなことを忘れて、無邪気に「これ大好き！」って言えるものって何かありますか？

（神尾） あ、肉が好きなんですよ。

会場 （笑）

（山下） パンチのある答えが（笑）

（神尾） 好きですね。

（山下） 最近女性も包み隠さず「お肉大好きです」という人が結構いらっしゃるんですね。それもすごくパワーになるというか、前向きな感じでポジティブに語られることが多いですけど。

（神尾） なんか元気が出るみたいな。

（山下） 思いますよね。実は私も、もう今日はこの大役が終わったらお肉食べようかなと（笑）

（神尾） そうですか（笑）

（山下） 心ひそかに思っていたので、「肉、ああ！」ってちょっと思っちゃいました。じゃあやっぱりそういうお肉パワーで元気になって、また作品を。

（神尾） はい。そうですね。

（山下） あまり細かいことを聞くのもなんですけれど、どういう形で召し上がるのが好きなんですか？ 焼肉とかステーキとかいろいろありますけれど。

（神尾） そうですね。焼肉とか、本当にステーキとか。

会場 （笑）

（神尾） そのまんまですみません。何でも好きです。食が基本だなと思っているので。若い頃漫画を描いている時って飲まず食わずで、1回原稿があがると2〜3キロ落ちているみたいな。すごく体に悪いというか、良くないやり方を取っていて、やっぱり好きなことを長くやるには健康でないといけないと思っていて。それで、「ちゃんと食べてちゃんと眠る、漫画も朝まで描かない」と、途中からそうしようと決めていました。

（山下） そうですか。結構、昼夜逆転なんて作家さん多いんじゃないかなと思ってたんですけど。

（神尾） 私も30代くらいまでは昼夜逆転で、もう10時だから寝ようとか、完全に日が上がって。

（山下） 午前10時ですか？

（神尾） そう、午前10時です。でも皆さんそういう方多いと思うんですけど、起きたら5時だけど朝の5時から夜の5時かわからないとか。

（山下） 薄暗くなってるともうね、判別つかない。

（神尾） そういう仕事のやり方だと、いつか身体を壊すのではないかと。壊したことはないですけどね、すごく丈夫なので。でも長くやるにはちゃんとし

ないとなと思って。

（山下） では途中から生活スタイルを切り替えて、しっかりお肉パワーで元気つけて。

（神尾） そうですね。ちゃんと食べてちゃんと寝ると。

（山下） そうなんですね。結構作家の方々って本当に生活スタイルがいろいろという印象がありました。

最後は先生の好きな食べ物のお話まで伺ってしまおうという、貴重なお話を伺う時間になりました。

もう間もなく終わりの時間を迎えます。そろそろ締めということですが、先生から武蔵野プレイスにプレゼントを頂けるとお話を伺っているのでご紹介いただきたいんですけども、よろしいでしょうか。

（神尾） はい。私が描いた『花のち晴れ』ですね。この全 15 巻を置かせていただいて、皆さんで読んでいただけたらと思います。あと色紙を。

（山下） ご寄贈いただきますこの『花のち晴れ』は、今日お越しになっている方々はきっと皆さんもうお読みでいらっしゃると思います。ですので、これからの未来を担う青少年達、10 代の若い方々にも先生の世界観を知って、キラキラの未来を描いていただきたいということで、この武蔵野プレイスには地下 2 階に青少年活動支援のフロアがあります。そちらに責任をもって置かせていただくことになっています。展示させていただく時に、青少年達へ先生からのエールということで、色紙も描いてくださったので、併せて展示させていただきます。それも青少年フロアのみとなりまして、青少年フロアはあいにく青少年しか入れないフロアとなりますので――

会場 （笑）

（山下） 大きなお友達は心の中で「うらやましいな」思うかもしれませんが、ぜひお手元の作品で楽しんでいただけたらと思います。ということで、こちら

は地下 2 階のスタジオラウンジで青少年が自由に閲覧できるように設置させていただくことになりました。ありがとうございます。

（神尾） ありがとうございます。

（山下） ここにいらっしゃる皆さんも含め、先生の作品は本当に幅広い世代から愛されていますので、青少年にとってもこれからたくさんの勇気をもらったり、漫画を読む楽しさを味わってもらうことができと思います。皆さんがこれからどういう風に読み継いでいくのか、10 代の皆さんの心にどういう風に刻まれていくのか、非常に楽しみです。

さあ先生、今日ここまでいろいろなお話を伺ってきました。1 時間半長いですよと仰ってましたけれど、意外とあっという間で。

（神尾） はい。意外とあっという間でした。

（山下） そうなんですよ。皆さん、もっともっと伺いたいことがいっぱいあったかもしれません。皆さんからのご質問の一部を構成してこうして伺ってまいりました。ぜひ最後に先生からご感想を伺えますでしょうか？

（神尾） はい。本日は皆さまご足労いただきありがとうございました。Zoom でお聞きになってる方々も本当にありがとうございました。私の話を聞いて一体楽しいのだろうか、ちょっと心配になっていましたが、皆さん今マスクしていらっしゃるんですけど、皆さんのマスクの下の口元がちょっと笑っていてくださると嬉しいなと思いながら、お話させていただきました。本日は本当にありがとうございました。

会場 （拍手）

（山下） 先生の温かいお人柄と作品にける想いが伝わってきました。作品が愛されているからこそ、先生のお手元を離れても皆さんが大事に育てている

という、またそこから先に広がる皆さんの想いというのが伝わってきた気がします。先生は普段はなかなか人前でお話しになったりですとか、皆さんとこうしたコミュニケーションをとられるという機会が減多にないということでしたので、Zoomでご覧になっている方々にはちょっとお顔はお見せすることはできませんでしたが、会場にいらっしゃる方々も、この瞬間、生でお話を伺えたことをきっとこれから思い出に、作品を改めて読み返していただけたらと思います。

では最後に、神尾先生に大きな拍手をお願いします！

会場 （拍手）

※「F4 Thailand／BOYS OVER FLOWERS」：
2021 年 12 月 18 日(土)よりテレ朝チャンネル1
で放送。その他、動画配信サービスにて配信。

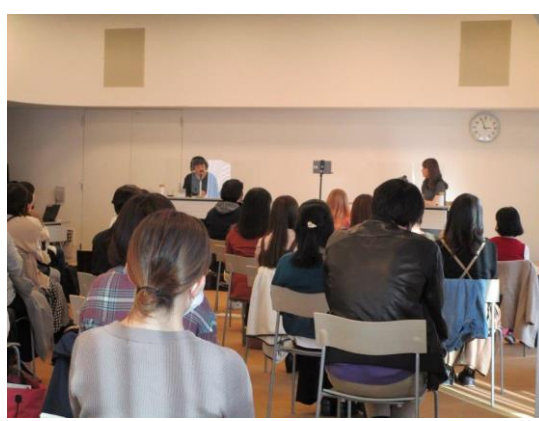
講演会の様子

当日、会場には約 70 名の方にご来場いただきました。

コロナ禍のため、神尾先生と司会の山下さんにはパーテーションを設置し、席の間隔を空けての開催となりました。

90 分間濃密で貴重なお話を伺うことができました。

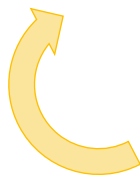
神尾先生、山下さん、ありがとうございました！



同時開催企画（１）

「消毒投票」

このコロナ禍で、ご来場の皆さまには手指消毒のご協力をお願いいたしました。
少しでも楽しんでいただけるように「あなたはF4のだれが好き??」と題し、「推し」
がいる方の消毒液を使っていただくプチ投票企画を行いました。
結果、ご来場の皆さまは、僅差で「道明寺・西門派」が多かったようです。



同時開催企画（２）

「神尾先生おすすめ本・関連図書展示」

神尾先生おすすめ本 10 冊と、図書館職員が選んだ関連図書を展示していました。
神尾先生のおすすめ本には、なんと先生直筆の POP も！
皆さまもぜひ読んでみてはいかがでしょうか。



その女アレックス ヒェール・ルメートル

残酷なサイパスキラーの話のため閲覧注意で
読む人も選ぶと思いまあが。

こんなに小説を売って怖くて何度も本を
閉じようとしたのは初めてでした。

物語の展開と仕掛けが、まるで映画を
観ているようでした。

火然えよ剣 司馬遼太郎

あまりにも有名な本ですが、18歳の時に
読書好きだった父の蔵書にあったので
なにげなく手に取って読んでみました。

それまで、一度も歴史小説というものを読んだ
ことがなく、長くて読みづらそうだなあと思ったの
ですが、若き剣士たちの強くも儚く散って
いく様に圧倒され涙しつつ、あっという間に
読み終えることができました。

特に、沖田総司の人物像に惹かれ、
その後の1/4漫画家としての理想の男性像
となりました。

🍃 楽園のキャンバス 原田マハ

原田マハさんの小説は、深い考察と綿密な構成で、独自の見解にあっておどろかされます。

作中で絵が描かれていないのに、映像として浮かんでくるような表現がとっても美しかったです。

🍃 坊っちゃん 夏目漱石

坊っちゃん、坊っちゃんといいますが、まさしく主人公の名前を明確にしていないところが面白かったです。

清(きよ)という、東京で坊っちゃんも待っているおばあさんを大事にしているところも好きだし、知らない土地へ行っても自分自身を変えない快活で強い人物像にも惹かれていました。江戸っ子ならではの、一本気な性格が不器用だけれども清々しい。落ちこみそうになったら、何度も読み返したい一冊です。

逆リクテス 伊坂幸太郎

伊坂幸太郎さんの作品は好きでたくさん読んでいます。

なかでもこの本は心にぐっときました。

理不尽なことを言う大人に対して何も言えず
じっと我慢していた幼かった自分に読ませ
たかったです。

悪童日記 アゴタ・クリストフ

タイトルもさることながら、独特の文体で
どくどくするような異国情緒ある
作品でした。

三部作をあべて読んだ時に受けた
衝撃は忘れられません。

① 流浪の月 風良ゆう

たった2人で、優しい夜の世界を生きて行こうと
する美しいお話でした。

誰がなんと言おうと惹かれあう2人を引き
離すことはできない、にがりのない恋愛を
描いたら、こういうお話になるのだなあ..と
思いました。

② 羊をめぐる冒険 村上春樹

漫画家になって駆け出しの頃、編集部の人達を
はじめ、誰もかれもが村上春樹さんの本を
読んでいたのを覚えています。

私も何れにもれず、原稿のしめきり前など
アシスタントさん達が寝静まったあと、自分の体は
疲れてボロボロだけれども、続きが気になって、
気になって。春樹ワールドに逃避していました。
私もまた、物語に迷い込んだ人物になって
楽しんでいました。

思い出トランプ° 向田邦子

向田邦子さんのお書きになるものはほぼ全て読みました。順風満帆で終わらず、ここにひっかき傷を残すような、リアリティのある物語が、いつ読んでも新鮮な感じがあります。

なかでも「犬小屋」は、あたかも隣の家で起こっているかのような感覚で、お話を引き込まれていきました。

まさにこうなってしまうという展開に進んで行くところが、現実よりリアルで、ドキドキしました。

言い寄る 田辺聖子

漫画家になる前に、おそらく初めて読んだ女流作家さんの本だと思います。

十代の頃、大人になることに絶望していた私は

田辺聖子さんの作品に出会って、早く三十代になりたいと思いました。自分の仕事を持ち、傷つきやすくもしなやかで芯の強い女性像に猛烈に憧れました。

私にとって、物語の主人公が己の友のようになったのは後にも先にも田辺さんが描く人物だけかもしれません。

同時開催企画（３）

「神尾先生への作品の思い出やメッセージ募集」

講演に先駆けて 10 月 1 日～31 日まで館内で神尾先生への作品の思い出やメッセージを募集し、当日パネルに貼り出して皆さまにご覧いただけるように展示しました。

神尾葉子先生のお名前から「葉っぱ」をイメージした用紙になっています。

ご応募いただいたもの、当日会場の皆さまにお書きいただいたものは、後日、神尾先生にプレゼントさせていただきました。

ご応募いただいた皆さま、ありがとうございました！



神尾先生より武蔵野プレイスにご寄贈いただきました

色紙のプレゼントと、『花のち晴れ～花男 Next Season～』をご寄贈いただきました。

『花のち晴れ～花男 Next Season～』は、武蔵野プレイス地下2階スタジオラウンジにて、青少年が自由に閲覧できる漫画として設置させていただいています。

神尾先生、ありがとうございました！



『花より男子』の原作者 漫画家 神尾葉子の創る世界



神尾先生への
メッセージや
作品の思い出を
大募集！

当日会場にて
神尾先生の直筆
おすすめ本POPを
展示予定！

©Yoko Kamio

開催日：令和3年 **11/7（日）** 午後2時～3時30分

会場：武蔵野プレイス 4階フォーラム（受講方法：会場またはオンライン）

講師：神尾葉子（漫画家）

参加費：無料

対象：高校生以上

定員：会場 50名

オンライン 100名（音声のみ）

*定員を超えた場合、会場ご希望の方のみ市内在住・在勤・在学の方を優先のうえ、抽選とします。

応募締切：10月15日（金）

*申し込み方法については裏面をご覧ください。



※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、開催方法の変更や中止となる場合があります。

主催



公益財団法人
武蔵野生涯学習振興事業団

ココロ・カラダ、あしたも元気に。

問合せ



ひと・まち・情報 創造館
武蔵野プレイス

〒180-0023 武蔵野市境南町 2-3-18
TEL 0422-30-1901

[ホームページ] 武蔵野プレイス



<https://www.musashino.or.jp/place/>

『花より男子』の原作者 漫画家 神尾葉子の創る世界

国内のみならず海外でも大人気の『花より男子』（集英社）など、数々の作品が幅広い世代に支持されている漫画家・神尾葉子さんをお招きし、長年に渡ってご活躍される中での経験や作品が与えた影響、その想いなど、作品と創作について質問にお答えいただきながら伺います。

みなさまからの質問も募集しますので、あわせてご応募ください。



©Yoko Kamio

同時開催・先生へのメッセージや作品の思い出を大募集！（メッセージ用紙はプレイス館内で配布しています。）
・当日会場にて先生の直筆おすすめ本POPも展示予定！

募集期間：10月1日（金）～10月15日（金）

申込み方法 1 メール

- ①希望のイベント名「フェスタ講演会」 ②氏名（ふりがな） ③住所 ④電話番号 ⑤生年月日
- ⑥Eメールアドレス ⑦市内在勤・在学の場合は、勤務先・学校名
- ⑧受講方法（会場またはオンライン） ***両方の申込みはできません**
- ⑨神尾先生へのご質問

以上を明記し、申込メールアドレスまで：placefesta@musashino.or.jp

または、右記二次元コードから、申込用メールフォームを読み込めます。



申込み方法 2 窓口

武蔵野プレイス3階生涯学習支援係へ。

※オンラインは音声のみの配信となり、会場の様子は映りません。あらかじめご了承ください。
※定員を超えた場合は、会場ご希望の方のみ市内在住・在勤・在学の方を優先のうえ抽選とし、10月21日（木）より結果を通知いたします。
※上記のメールアドレスからのメールが受信できるように設定をお願いします。
※定員に達しなかった場合は10月21日（木）より追加募集を行います。

お申込み時にいただいた個人情報は「武蔵野市文化・スポーツ・生涯学習ネット」を運営する武蔵野生涯学習振興事業団及び武蔵野文化事業団が管理運営する施設の予約及び教室の実施・運営に必要な範囲内で使用いたします。それ以外の目的で使用することはありません。

神尾 葉子（漫画家）

1986年『はたちのままで待ってる』でデビュー。1992年～2004年まで雑誌「マーガレット」で連載された『花より男子』で、第41回小学館漫画賞（少女部門）を受賞。単行本の累計発行部数は6100万部を超え、アニメ・ドラマ・映画など国内でのメディア化のみならず、台湾、韓国を始め世界各国で翻訳・ドラマ化され人気を博している。他にも『キャットストリート』、『虎と狼』、『まつりスペシャル』、『花のち晴れ～花男 Next Season～』など作品多数。



プレイス・フェスタ
2021

～夢を叶えよう、プレイスの街～

神尾葉子

先生への

作品の思い出やメッセージを

大大大募集!!



©Yoko Kamio



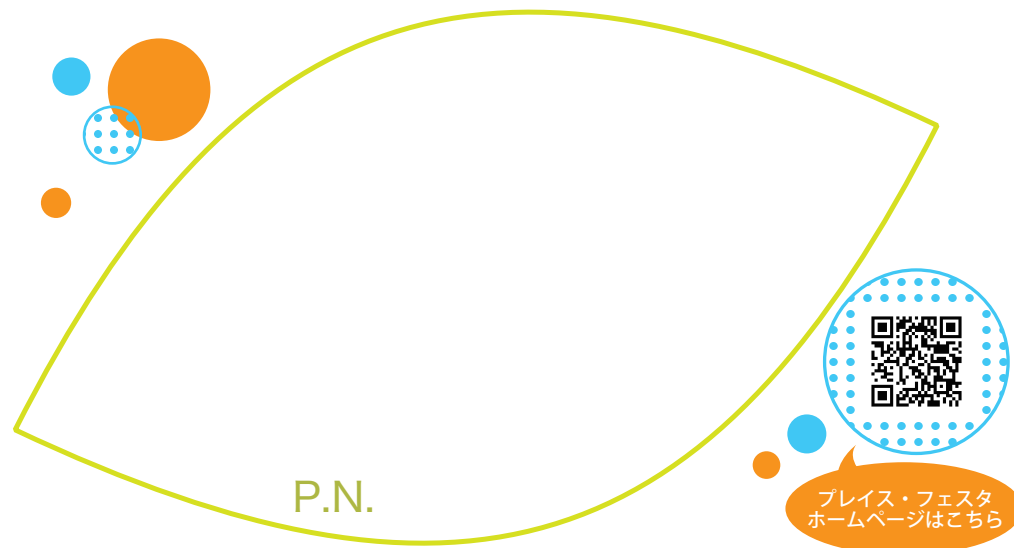
令和3年11月7日(日)に武蔵野プレイスで開催する

プレイス・フェスタ 2021 講演会「漫画家 神尾葉子の創る世界」関連企画!!

『花より男子』や『キャットストリート』(共に集英社)などの作品の思い出や
神尾先生へのメッセージを募集しています。

応募についての注意事項

- ◎ 葉っぱの枠内に収まるように記入してください。◎ 締切：10月31日(日)
- ◎ ペンネームのご記入をお願いします(本名・フルネーム不可)。
- ◎ 応募場所：1階情報コーナー設置ポスト
- ※ 応募してくださった用紙は講演会当日会場で掲示し、講演会終了後に神尾先生にお渡しする予定です。
- ※ 内容により、上記にあたらない場合があります。



P.N.

プレイス・フェスタ
ホームページはこちら

みなさまの熱い思い・メッセージお待ちしております!!

プレイス・フェスタ
2021

～夢を叶えよう、プレイスの街～

神尾葉子

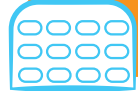
先生への

作品の思い出やメッセージを

大大大募集!!



©Yoko Kamio



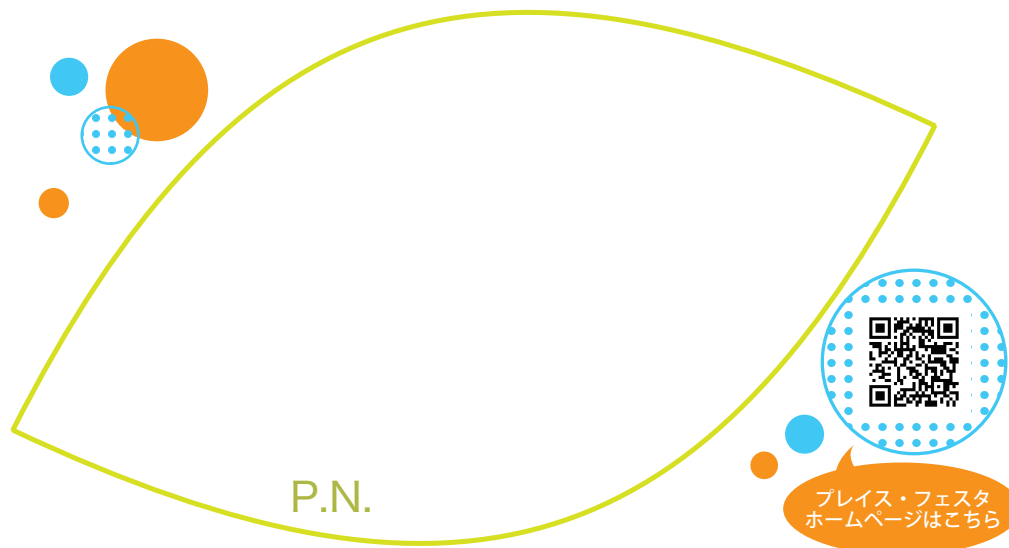
令和3年11月7日(日)に武蔵野プレイスで開催する

プレイス・フェスタ 2021 講演会「漫画家 神尾葉子の創る世界」関連企画!!

『花より男子』や『キャットストリート』(共に集英社)などの作品の思い出や
神尾先生へのメッセージを募集しています。

応募についての注意事項

- ◎ 葉っぱの枠内に収まるように記入してください。◎ 締切：10月31日(日)
- ◎ ペンネームのご記入をお願いします(本名・フルネーム不可)。
- ◎ 応募場所：1階情報コーナー設置ポスト
- ※ 応募してくださった用紙は講演会当日会場で掲示し、講演会終了後に神尾先生にお渡しする予定です。
- ※ 内容により、上記にあたらない場合があります。



P.N.

プレイス・フェスタ
ホームページはこちら

みなさまの熱い思い・メッセージお待ちしております!!

プレイス・フェスタ 2021 講演会
漫画家 神尾葉子の創る世界
(2021 年 11 月 7 日開催)
講演録

2022 年 3 月

発 行 公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団
武蔵野市立ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス
〒180-0023 東京都武蔵野市境南町 2-3-18
電話 0422-30-1900